

寢覚・浜松・更級の歌に関する考察

鈴木弘道

一 はしがき

寢覚・浜松・更級の歌に見られる特徴と孝標女の歌に於ける特徴とは大体一致するものと考えられるが、勿論のことだけで寢覚・浜松が孝標女作であると断定することは危険である。（「平安文学研究」第二十二輯所載、拙稿「寢覚・浜松の和歌と孝標女の和歌」。しかし、更に、三者の中で互に類似する歌が多数探り得られるならば、それは寢覚・浜松の作者を孝標女とする一根据として十分価値のあることにもなるのではあるまいか。こうした研究で注目されるべきものとしては、夙に増淵恒吉氏の「浜松中納言物語と寢覚物語」（改造社版「日本文学講座」第三巻 物語小説篇（上）所収）があるが、文章中の同一または類似語句についての考察が中心となつてゐるため、歌に關してはなお不十分な嫌ひのあるのはやむを得ないことである。以下、増淵氏の御研究を参考にしつつ、類似歌の調査を進めたいと思う。（引用歌は、寢覚については橋本佳氏編「校本夜半の寢覚」、浜松については校註日本文学大系本「末巻のみ古典文庫本」、更級については宮田和一郎氏著「更級日記評釈」を使用。なお圈点等の符号は筆者の附したものである。）

二 三者の歌に共通の類似性のあるもの

- (一) (イ) よにしらぬ露けさ(き)なり(せ)れ(れ)や別るれ(れ)またいと(か)か(る)る(る) 曉ぞなき(寝覚卷一、一六頁)
- (ロ) 我が世にもまだ知らざりし曉の(か)る(る)別れに(ま)ど(ど)ひぬる(か)な(な) (浜松卷の一、二一六頁)
- 増淵氏は、(ロ)は(イ)と同一環境にあつてもに酷似してゐることを述べられたが、圈点を附した語句が同一であるほか、更に次の浜松所載の歌にも同一或は類似の語句の使用されてゐることを知るのである。
- (ハ) さらでもあらばあらん(な)ん世中になど(れ)の別なり(け)ん(寝覚卷一、一六頁)
- なお、(イ)と調子その他に於て類似性の強い歌として見做されるものに、孝標女のものがある（×印参照）。
- (ニ) 故郷にかくこそ人は帰(り)けれあはれい(か)なる別(なり)けむ(更級、一五六頁)
- もつとも、(イ)(ロ)(ハ)のそれぞれにある「かゝる」「かゝる」「かゝら」「かく」はとも下との接続語が異なり、また(ハ)の「など」と(ニ)の「いかなる」も別の語であるが、意味は相似通うものである。し

かも、(ニ)にある「別なりけん」を使った他の作者の歌を「国歌大観」に拠つて探つて見ると、続後拾遺集に為道朝臣の歌が一首あるのみで、「統国歌大観」には見当らない。その歌も、

八元 いつまでかうき鳥の音を厭(ひ)ても逢ふ事絶えぬ別(なり)けむ(む)

で、(イ)(ニ)に使われた「など」「いかなる」のような疑問語は、その第一句にこそ「いつまでか」という語があるが、これは「など」「いかなる」の意味の親近性と比較すると全く異質のものであり、また(ロ)(ハ)のごとく「別なりけむ」の直前には使用されていないから、結局この歌は、(イ)(ニ)の類似性とは相当隔たつたがある。従つて、(イ)(ロ)(ハ)は同一作者即ち孝標女作ではなからうかという疑問が抱かれるわけである。なお、以下の類似歌も「正統国歌大観」に拠つて一応他作者の歌にも見られるか否かを検討して見るが、「国歌大観」といっても現存のすべての歌を収載しているわけでもなく、また、その他にも多くの散逸した歌が当然あつた筈であるから、「国歌大観」のみに拠ることは相当冒険には違ひない。けれども、大体の見当を究めるにはそれで差支えないものと考えられる。

- (一) 有しにもあらず(き)き世にすむ月の影(こ)そ(み)し(か)は(ら)ざ(り)け(れ) (寢覚卷二、一三四頁)
- (ロ) むしの音も花の匂(ひ)も風のおとも見し世の秋(か)は(ら)ざ(り)け(り) (浜松卷の一、一九六頁)
- (ハ) 逢坂の関の関風吹く(こ)ゑは昔聞き(し)にかはらざりけり (更級、二九九頁)

「……かはらざりけり」という読み方は、「正統国歌大観」にも見

寢覚・浜松・更級の歌に関する考察

られないことはないが、右の三首はいずれも句調が類似するとともに、見聞した現在の事実が過去の体験にあるという思想の一致してゐるもので、それは次の二首も同様である。

- (一) いつとだにうき身は思(ひ)わかれぬを(に)せ(み)し(か)は(ら)ぬ(春の曙) (寢覚卷四、二二五頁)
- (ロ) 咲きにはふ花も霞ももろとも(み)し(な)が(ら)なる春のあけぼの (寢覚「拾遺百番歌合、三番」)

しかも、(ロ)と(ハ)は「花の匂ひも」に対し、「にほふ花も」であり、全体の内容も頗るよく似てゐる。

- (三) (イ) にはの海やしほ(ひ)にあらぬかひなさは(み)る(め)か(づ)か(む)かた(のなきかな) (寢覚卷四、二二二頁)
- (ロ) にはの海の蟹もか(づ)きはせぬものを(み)る(め)寄(せ)ける風の吹くらむ (寢覚卷の四、三八三頁)

藤田徳太郎氏も「夜の寢覚物語について」（藤田・増淵両氏共編「校註夜半の寢覚」限定版所収）にて、この二首を挙げ同一作者の傍証としておられるが、このほかにも、

- (ハ) 別れにしわが故郷の(に)ほの海にかけをならべし人ぞこ(ひ)し(き) (浜松卷の一、一九三頁)
- とある歌は部分的に「にほの海」を使ってある点、心理的に同一作者として聯関があるのではなからうか。こう考えて、さて更級日記を見るに、
- (ニ) 袖濡るる荒磯浪と知りながらともにか(づ)きをせしぞ恐(し)き (浜松卷の一、一九三頁)
- (ロ) 荒磯はあされど何のかひなくて潮に濡るる海士の袖(か)な (三四三頁)

(ノ) みるめ。生ふる浦にあらずば荒磯の浪間数ふる蟹もあらじを
(三四三頁)

の類歌のあることに気がつく。しかし、(ハ)は孝標女の歌であっても、(イ)は、以前宮仕の友達であった女房達の歌であって孝標女のものではない。また、「にほの海」「みるめ」「かづく」「蟹」などの語は孝標女以外にも多くの人が使ったものであるから、(イ)(ロ)(ハ)の類似性は一般的なものであるかも知れない。けれども、(イ)(ロ)のごとく、「にほの海」の語に「みるめ」または「かづく」の語を加味した歌は他に殆どなく、唯、次の二首のあることが「統国歌大観」に拠って知られるのみである。

〔四九一〕鳩のうみや汀の外の草木までみるめ。落の雪の月かげ
(拾遺愚草)

二三〇 己れさへみるめは絶えぬ帰る雁鳩の海辺の春の霞に
(壬二集)

しかし、壬二集の方は(イ)(ロ)とは全く使用法に相異のある歌であり、拾遺愚草の方は「鳩のうみや汀」が第一句に、「みるめ」が第四句に位置している点些か似通うけれども、(イ)(ロ)相互の類似性の度合と比較すると、これも全然別の感じがする。従って、(イ)(ロ)はやはり同一作者の傍証とも考えられ、殊に、(イ)(ロ)間ほどの類似性はないが類歌とも見做し得る(ニ)を、孝標女が作っているという事実を考慮すると、(イ)(ロ)も孝標女作ではなからうかという疑の気持を更に倍加させるのである。

四 (イ) 時。鳥あはれるねに志賀の浦のなみだにいとよまよ
(マ)とひ

(ア) 思ひいでよそらちぎりし言の葉を
(浜松巻の二、二七二頁)

(ロ) にははす花の香をば尋ねよ
(浜松巻の二、二八七頁)

(ハ) くりかへし猶かへしても思ひ出でよ
(浜松巻の三、三一頁)

(ニ) 恋ひぎと告げよ西へ行く月
(更級、三四五頁)

三 寝覚・浜松の歌に類似性のあるもの
(寝覚巻四、二一五頁)

(イ) みくさみし野中の水を結びあげてしづくに。ごる今のわび
しき
(浜松巻の二、二六八頁)

(ロ) 心からしづくに濁る。別れかなすまば歌かであるべきものを
(浜松巻の二、二六八頁)

(ハ) は明らかに紀貫之の歌を本歌としているものであるが、それは古今集巻第八離別歌或は拾遺集巻第十九雑恋に、

四四 むすぶ手の雫に濁る山の井のあかでも人に別れぬるかな
(国歌大観本)

と見える。しかし、(イ)にはその類似歌として狭衣物語に、

一七五 立ち返りしたは騒げど古への野中の水はみくさみにけり
(国歌大観本)

という歌があつて、寝覚作者がこの歌から暗示を得たか或は狭衣物語作者が(イ)から暗示を得たかについては今俄に判断し難いが、いずれにしても寝覚作者が「しづくに。ごる」を使っていることを考えると、やはり右の貫之の歌と関係のあることは否定できないであろう。「国歌大観」に拠ると、「しづくに。ごる」の語を用いた歌としては右の貫之の歌以外に玉葉集に清輔朝臣の歌として、

ぬるかな
(寝覚巻二、八二頁)

(ロ) 時。鳥花たちばなにこがれてかゝるしのびの音だに絶えじ
な
(浜松巻の三、三一三頁)

(ハ) 都には待つらむものを時鳥。今日日ねもずに鳴きくらすかな
(更級、一七三頁)

「時鳥」を詠んだ歌は当時数限りなくあつて、(イ)(ロ)の歌もさして珍らしいものではなく、従って両物語の作者同一説に対する傍証としては積極性に欠けるところがあるけれども、(イ)(ロ)の第一句に採られていると同時に孝標女の歌として更級日記にも見えていることを考えて、ついでに挙げたまでである。

(四) 右と同じく、両物語作者の歌及び孝標女の歌の特徴とまでは考えられないが、かなり注目されるもので、命令的口調を帯びている歌の一部を拾い出すと次の通りである。これも他に屢々用いられる手法であるが、唯、三者ともに見られるというに過ぎない。

(イ) よそへつゝ哀ともみよみるまゝに(寝覚巻二、一〇九頁)
(ロ) 哀とも露(七)や(七)だにかけようちわたし
(寝覚巻二、一一〇頁)

(ハ) 同じ心にかたみとも思へ
(寝覚巻三、一五七頁)

(ニ) まして思へさ月の空のやみにさへ(寝覚巻四、二六四頁)
(ロ) みだるとつげよ秋の夕風(寝覚拾遺百番歌合、九番)

(ハ) 露のこらじと君につたへよ(寝覚拾遺百番歌合、十四番)

(ロ) 晴れずばしよし立ちとまれかし(浜松巻の一、二二六頁)

(イ) こよひの月はこゝに來て見よ(浜松巻の二、二五七頁)
(ロ) うらみぬほどにおとをきかせよ(浜松巻の二、二六〇頁)

一四七 我が為は雫に濁る山の井のいかなる人にすまむとすらむ
また、新葉集に前中納言為忠の歌として、

七 つれもなき梢の雪も消えそめて雫に。ごるまつのした水
二四七 いかせむ流石夜な／＼水馴棹雫に濁る。宇治の川長
(拾遺愚草)

三六三 立寄らば涼くやあると掬ぶ手の雫に濁る。井出の玉水
(千五百番歌合)

これらの諸歌を見渡してもやはり(イ)(ロ)は同一作者の手になったと見る方が正しいのではあるまいか。そして、もし孝標女の歌に(イ)(ロ)と関係のあるものがあれば、なおさらこの疑が深くなる筈である。ところで増淵氏は更級日記所載の、しかも右の貫之の歌を本歌とする、山の井の雫に濁る水よりもこはなほ飽かぬ心地こそすれ
(一六七頁)

の歌を挙げ、これが(イ)及び(ロ)と「暗合がありはしないか」と考えておられる。けれども、日記の示すところに拠れば、この歌は孝標女の歌ではなく、彼女が靈山に詣でた時、山寺で「水飲む人」の作つたものであるから、これを以て(イ)(ロ)が孝標女の作とすることは早計である。しかし、更級日記は、五十嵐力博士が、「思ふに彼女は手控の歌などを便りにして、長い既往を想ひ出し思ひ出し書きつづけたのであらう。」といはれ(訂新平安朝文学史 下巻「四五二頁」、また宮下清計氏「日本文学研究」昭和二十五年五月号所載「更級日記の歌の位置」も、孝標女が五十二歳頃に過去のことを追懐し、その時々々に詠んだ自分の歌や記録等を材料として記されたものであ

ろうといわれているから、これらの説に拠ると、日記に記されている事項は大体印象的なものが多い筈である。「水飲む人」の歌も恐らく孝標女にとっては常に脳裏に刻みつけられていたものではあるまいか。しかるに寢覚・浜松にはともに「水飲む人」の歌と類似するものがあり、しかもこれらが同一作者の手に成ったものとする、この作者はよほど「水飲む人」の歌に心を惹かれていたと推察し得る。それは即ち孝標女を措いてほかにない。そうすると、(イ)は当然孝標女の歌であるべきだ、とこのように考えれば、増淵氏のいわれる「暗合はありはしないか」の意味も、「三つの歌の作者が同一だ」というのではないことが理解できる。しかしながら、右のごとき推論を採るならば、逆説的に「(イ)は『水を飲む人』の作にあらずや」という考え方も一応成立しないこともなからう。けれども右の推論は、別の立場から両物語が孝標女作ではないかと思われる点の指摘し得ることも念頭に置いての推論であることはいうまでもないから、たとえ(イ)が「水飲む人」の歌に類似していたところで、他にそういう傍証も成立するならまだしも、僅かにこの事項一つだけでそのように結論するのはむしろ暴論といえるであろう。

(イ) 涙のみたかせの浜による舟のなぎさもみえずこがれわたれば

(寝覚巻一、四二頁)

(ロ) いかなれや浦島にのみ波かけて高瀬の浜によらじとはする

(浜松巻の四、三四二頁)

増淵氏は、「高瀬の浜」は「高師の浜」の誤で、両物語ともに同じ誤が犯され、しかも他の物語にも「高瀬の浜」という地名が使用されていないことなどに拠り、同一作者説の一傍証としてをられるが、

(イ) 筏士やいかにと思ひ

(寝覚巻三、一五六頁)

(ロ) そま河におろす筏のいかにとも云ふべきかたもなくぞなかる

(浜松巻の三、一五六頁)

「筏士」を詠み込んだ歌は、「正統国歌大観」とも相当に多く見られるが、「筏士」に「如何」を懸けた例は、増淵氏も指摘されているごとく、続古今集巻第三夏歌に、

三三 柚川の山蔭くだすい。かだしよいか。浮寐の床はすゞしきとあるほか、宇津保物語祭の使巻に、

浅き瀬にながれてくだる筏士はいくら(く)のくれかながれ来ぬらむ

(校註日本文学大系本、二七六頁)

があるくらいなもので極めて例が少くない。にも拘らず両物語に採られているのはやはり注目に値する。

(イ) さやかにもみつる月かなことなら

(寝覚巻一、二二頁)

(ロ) 天の原雲あはるかにゆく月

(寝覚巻一、二二頁)

(ハ) 別れにしわが故郷のにほの海にかげをならべし人ぞこひし

(寝覚巻の二、二七九頁)

(ニ) 雲居にもかよふ心のありければめぐりあひてもかげならべ

(浜松巻の二、二七九頁)

寝覚・浜松・更級の歌に関する考察

なおそれ以外に「高瀬の浜」を詠んだ歌も「正統国歌大観」には見られないから、恐らく同一作者の歌ではなからうか。

(イ) かたみぞとみるたびごと涙のみかゝるやなぎ

(寝覚巻二、一〇六頁)

(ロ) かたみぞと暮るゝ夜ごとに詠めてもなぐさまめやはなかなる月

(浜松巻の一、二四七頁)

第一句・第二句の調子が類似するとともに、「かたみぞと……ごと」の形は「正統国歌大観」にはいずれも見えず、これも作者同一説の一傍証とするに足るものである。

(イ) たちもあはねをならべしむら

(寝覚巻二、一二八頁)

(ロ) 我が世にもまだ知らざりし暁のかゝる別れにまどひぬるか

(浜松巻の一、二一六頁)

「かゝるわかれに」「かゝるわかれを」使った歌は「正統国歌大観」には一首も見られないが、「かゝるわかれの」とあるのは「国歌大観」に二首、

三三五 行くすゑの深き契もよしやたゝかゝる別の今なくもがな

(統千載集 巻第十三恋歌三)

六二 月までも思へばつらし何としてかゝる別のあり明のそら

(新葉集 巻第十三恋歌三)

があり、「正統国歌大観」には「かゝるわかれは」とあるのが一首見えるに過ぎない。

一六二 天の河安の河原に定まりて斯る別はとくと待たなむ

(赤人集)

(イ)に使われた「影をならぶる」と使ったものは「正統国歌大観」にそれぞれ一首ずつ見られるだけで、例の少ないものである。

二三 には鳥に影をならぶる若駒はいつか菖蒲に引き別るべき

(源氏物語螢巻)

三三〇六 相坂のせきの岩角引きつれて影をならぶる望月の駒

(千五百番歌合)

また、(ロ)にある「かげをならべし」「かげならべばや」と同語句を使用した歌は「正統国歌大観」には見当たらないが、やや異なった表現で用いられているのは次の通りである。

計	国歌大観		正統国歌大観	
	一首	七首	(なし)	五首
一首	一首	一首	一首	一首
一首	一首	一首	一首	一首
一首	一首	一首	一首	一首

即ち、「かげをならべて」以外の表現は稀である。しかるに、あまり例のない「影をならぶる」「かげをならべし」「かげならべばや」を、寢覚に二首、浜松に二首も使われているのは、同じ作者の個性が現れた証拠のように思われる。

(イ) しらざりし雲のうへにもゆきまじり思ひのほかにすめばす

(寝覚巻一、四〇頁)

(ロ) 憂しと思ひあはれと思ひ知らざりし雲居の外の人のちぎり

(浜松巻の一、二一六)

「知らざりし」を用いた歌は「正統国歌大観」ともに見られるが、

「雲」をそれに続けた例は他に一首も見られない。もっとも、(B)は「雲居」となっているが、ここでは別に問題ではあるまい。

(C) 以下の諸例は、他の作者の歌にもかなり見られるものもあるから、積極的に作者同一説の傍証とまではなし難いが、同一作者と仮定した時に、その心理的聯関あることが肯かれるものを挙げて見ることにしたい。

- (イ) も、しきを昔ながらに見ましかばとおもふも悲ししづのを。だまき (寝覚巻三、一五七頁)
- (ロ) 契りしを心ひとつに忘れねどいかゞはすべきしづのをだまき (浜松巻の三、三一頁)

「しづのをだまき」を詠んだものは、「国歌大観」には多数見られ、「統国歌大観」には一首もなす。

- (イ) 何事をいかにうらみてしら雲の八重(鳥サ) たつ山におもひいりけん (寝覚巻四、二七二頁)
- (ロ) なにごとを我歎らんかげろふのほのめくよりもつねならぬよに (浜松末巻、七四頁)

「何事を」を用いたものも、「正統国歌大観」に多し。

- (イ) ふるさとに面かはりせでめ(セお) ぐりあへる(セぬ) 契嬉しき山のの月 (寝覚巻五、三一八頁)
- (ロ) 住みなる、人はいかにかながむらむふかく身にしむ山の端の月 (浜松巻三、三三九頁)

「山のはの月」も「国歌大観」に多数あり、「統国歌大観」にも一首見られる。増淵氏も語句の類似としてこの二つを挙げておられる。

(B) (イ) うき世には我すみ侘ぬ郭公しての山ちのしるへやはせぬ

即ち、(イ)(ロ)はともに、他人の苦しい訴えに対して、自分にはより上の大なる苦痛のあることを詠んだ点に於て、事情が通じているわけである。従って、このような同じ思想を、当時殆ど誰もが用いない「まして思へ」を第一句に持って来た(イ)の作者は、(ロ)の作者か或はそれと聯関のある孝標女ではなかったかという想像がつく。しかも、別の立場から、それを(ロ)の作者とする傍証が成立しないならば、結局、孝標女が作ったのではあるまいかと考えられぬこともないであろう。

五 浜松の歌と孝標女の歌に類似性のあるもの

- (一) (イ) 今ひとめよそにやは見むこの世にはさすがに深き中のちぎりぞ (浜松巻の一、二二頁)
- (ロ) まだ人目知らぬ山辺の松風も音してかへるものとこそ聞け (更級、一七六頁)

「今ひとめ」「まだ人目」の語を使った歌は「正統国歌大観」を通じて拾遺集巻第十四恋四に「よみ人しらず」の歌として一首あるに過ぎない。

八 荒 いかほのやいかほの沼のいかにして恋しき人を今一目みむ

しかし、これは第五句にあって、第一句に用いられた(イ)(ロ)とは少々異なっている。

- (一) (イ) あさみどり霞にまがふ月見れば見し夜の空ぞいとこひしき (浜松巻の一、二二三頁)
- (ロ) 浅緑花もひとつに霞みつつおぼろに見ゆる春の夜の月 (更級、二八三頁)

(B) (イ) しての山こえ侘つゝぞ(二字も) 帰りこし尋ぬ人を待とせし(まに) (浜松末巻、一三六頁)

「しての山ち」「しての山」を使った歌も「正統国歌大観」に多く見える。

四 寝覚の歌と孝標女の歌に類似性のあるもの

- ここに属するものは殆ど見られないが、
- (イ) まして思へさ月の空のやみにさへかきくらされてま(サ) (寝覚巻四、二六四頁)
 - (ロ) まして思へ水の仮寝のほどだにぞ上毛の霜を払ひわびける (更級二七一頁)

と第一句が同一であって、こういう使い方はこれらを除いて「国歌大観」には見当らず、「統国歌大観」には拾玉集に一首あるに過ぎない。けれども更級日記に拠ると、(ロ)は孝標女の歌でなく祐子内親王に仕えた一女房の歌であって、孝標女が内親王の御前に寝た晩、水鳥の羽ばたく音を耳にし、自分が色々内親王のために心遣いしながら安眠できないのを、水鳥の浮寝に較べて詠んだ歌に対して、右の女房が、自分こそより以上に今までから始終気を使っていたのだから自分のことを考えて見よと返歌したものである。また、(イ)は寝覚上が、西山にいる父の処へ移る決心を新中納言に語ったその翌朝、以前に寝覚上のもとと一緒にいたがその頃はもう連れ出されてしまっていた、わが子大姫君から切ない気持を訴えた文に接して、早速、自分の心境こそ複雑でまたあわれであることを返歌したものである。

(イ)の「見し夜」は「見し世」かも知れないが、いずれでも意味が通じる。「あさみどり」「霞」「月」等々の語は誰もが用いるものであって、さして珍らしいものではないが、全体に於てこの二首は類似するであろう。

- (一) (イ) 交しけむ契りの枝のかひぞなき遠山どりのよそに見ゆれば (浜松巻の一、二二三頁)
- (ロ) 契りけむ昔しの空にたとへても尽きせぬものは我が世とぞ思ふ (浜松巻の一、二二三頁)
- (イ) けふりけむ人を誰ともしらぬたに夕の雲はあはれならずや (浜松「風葉集」)
- (ロ) 契りけむ昔の今日のゆかしさに天の河波打ち出でつるかな (更級、一四二頁)
- (イ) のぼりけむ野辺は煙もなかりけむいづこをはかと尋ねてか見し (更級、一五七頁)

この五首は第一句と第二句の一部分の口調がすべて似通うものであり、また「交しけむ」「けぶりけむ」「のぼりけむ」を使用した歌は、「正統国歌大観」には他に見られず、「契りけむ昔」を使ったものは「国歌大観」に次の二首、「統国歌大観」に次の一首が見られるだけである。

- 一〇三 君と我いかなる事を契りけむ昔の世こそ知らまほしけれ (新千載集 巻第十一恋歌一)
- 三六 くもれとや老の涙も契りけむ昔より見るあきの夜のつき (統後撰集 巻第六秋歌中)
- 三六七 契りけむ昔嬉しき海士舟の便にかゝる法とこそみれ

(御堂関白集)

しかし、新千載集及び統後撰集の歌は、前者は(四)と同じく「契りけむ昔の」となっている。後者は「契りけむ昔より」となり、しかも両者ともに第三句・第四句には入っている点(六)と異なる。また、御堂関白集の歌は、(四)のごとく「契りけむ昔の」となっていない点も異なっている。従って、(四)(六)(七)はともに同一作者、孝標女の個人的な匂いが滲透しているのではあるまいか。

(四) 身のうさにしをらで入りし奥山になにとて人のたつねきつらむ。
(浜松巻の一、一二五頁)

(四) 月も出でて闇に暮れたる娘捨に何とて今宵尋ね来つらむ。
(更級、三七〇頁)

この二首は第四句・第五句の表現・口調に類似性があるほか、全歌の内容も酷似しており、しかも「統国歌大観」に拠れば、祐子内親王家紀伊集に口調・内容とも似通うものが一首あるに過ぎない。

二三六 山深みくる道もなき青つやら何とて人の尋初むらむ。

しかし、全体としては(四)(六)の類似性は紀伊の歌より遙かに濃厚であるから、(四)はともに同一の孝標女の作と考えてはいかがであろうか。

(四) 冬ごもりよし野の山に雪ふりていと人めや絶えむとすらむ。
(浜松巻の四、三三三頁)

(四) 雪ふりてまれの人目も絶えぬらむ吉野の山の峰のかけみち。
(更級、一六一頁)

藤田氏(前掲論文)もこの二首の類似性を指摘して浜松が孝標女作である一傍証としておられる。

四四

(六) 以下は、「正統国歌大観」にかなり見られる語句を用いた歌であるが、浜松が孝標女作であると考えた時に、なるほどと思われるものを参考のために挙げて置こう。

(四) 西へゆく月のひかりを見てまづ思ひやりきとしらずやありけむ
(浜松巻の二、二七八頁)

(四) 夢さめて寝覚の床の浮くばかり恋ひきと告げよ西へ行く月
(更級、三四五頁)

「西へゆく月」を用いた歌は「国歌大観」に七首、「統国歌大観」に四首見える。

(七) 時鳥花たちはなにこがれてかゝるしのびの音だに絶えずに四首見える。
(浜松巻の三、三三三頁)

(四) さらでだに花橋は身にしむにいかにしのびの音さへ泣かれむ
(浜松巻の三、三一四頁)

(六) 時ならず降る雪かとぞ眺めまし花橋のかをらざりせば
(更級、一二六頁)

(六) 空 うしとだに思ひ出でじと忍べども猶あまの戸をあけがたの
(浜松「拾遺百番歌合三十番」)

(四) 天の戸を雲居ながらもよそに見て昔の跡を恋ふる月かな
(更級、二六六頁)

(四) 右のほか、孝標女の歌ではないが、更級日記に記されてあるもので、浜松作者の歌と類似点のあるものを挙げて置く。

(四) 何となく暮れゆく空をながめつゝ事あり顔にうれしきはなぞ
(浜松巻の二、二六四頁)

(四) 月もなく花も見ざりし冬の夜の心にしみて恋しきやなぞ

られるであろう。

六 結び

寝覚・浜松はともに同一作者の筆になるもので、しかもそれは原孝標女であるとする従来の諸説の根拠は概ね妥当であるのみならず(これについては別の機会に譲る)、更に、その性質上最も個人的なものを有している、歌について比較検討してみると、そこには著しい共通的性格が見られると同時に、それらの歌の中に酷似する語句・調子・思想等の使用されているものがあることが看取され、しかも矛盾するところが殆どないから、両物語の作者を孝標女と考えても早や差支えはあるまいと思う。もっとも、私は歌に注目してそこに一つの根拠を見出したわけであるが、それには先学の指摘された他の多くの根拠が前提となっているのは、今更いうまでもない。従って、私は決して他の根拠を無視し、ひとり歌のみを採り挙げてこれを唯一の根拠としているのではなく、両者相俟って結論の確実性を増加させる一方便となすものである。

(附記) 本稿は、恩師清水泰先生に国文学研究の手ほどきを受けていた若い頃の幼稚なもので、まことに恥かしい限りであるが、先生の御恩を感謝し、却って懐かしい旧稿のままを「記念号」に出すことにした。その後、一部の歌については宮下清計氏

や渡辺宏氏の研究も出た。また最近、武田宗俊氏の、孝標女の作品中の歌に関する研究が発表されたことを本稿の校正中に知り、福島大学図書館の御厚意によって拝見させていただいたが、本稿と重複する部分もあり、屋上屋を架した感がないでもない。併読を望む。——昭和三四・九・二四記——

当時「なぞ」を第五句に持つて来ることは極く稀で、武田宗俊氏(「文学」昭和二十六年七月号所載「宇津保物語の成立年代並に作者に就いて」)も、「第二句又は第五句に『なぞ』をおくのも特殊な強い声調を持つがこれも後撰拾遺時代のみ見る語である。」といておられる。このような当時あまり用いられない語が(四)(六)に見えるのであるが、(四)は日記に拠ると関白藤原頼通に仕えている女房の歌である。しかるに、前述の「水飲む人」の歌の場合と同じく、(四)が日記に記録されているほど孝標女にとって印象的な歌であったから、孝標女が必ずしもそれを模倣したり引用したりしないこともないであろう。浜松が孝標女作として、かく考えれば別に不合理は生じないのではあるまいか。

(四) 右と同様に考えられるものがまだほかにある。即ち、
(四) 一声にあかずと聞きしみじか夜も秋のまよの心地こそすれ
(浜松巻の三、三一七頁)

(四) 明くる待つ鐘の声にも夢さめて秋の百夜の心地せしかな
(更級、一六二頁)

「秋のまよの心地」を使用した歌は、「正統国歌大観」ともこれ以外に見当たらない。もっとも「秋のまよを」とあるのは、万葉集(巻第四相聞)・風雅集(巻第十六秋歌中)にそれぞれ一首ずつ見える。(四)は父孝標の国司に任官する予定が外れた翌朝に、「同じ心に思ふべき人」の詠んだ歌で、これも孝標女にとっては忘れられない印象的な歌であったに違いない。従ってこの歌から暗示を得て、あまり誰も使用しない「秋のまよの心地」を浜松に用いたとも考え

四五